

愛知県三河地域における生活科模索期の授業創りについて

福 應 謙 一

(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

An Analysis of Introductory Process of Living Environmental Studies into Practice in 1990's: A Case of Mikawa region

Kenichi Fukuou

(Graduate student, University of education)

I 研究の目的と方法

1 研究目的

昭和 62 年 12 月、教育課程審議会の答申によって「生活科」の新設が決定した。従来の小学校低学年における社会科・理科を廃止して新設する教科である。

新しい教科の実施が決まると、その方向性を明らかにする動きが見られた。当時の文部省の教育課程研究校において「生活科」を位置付けて実施されることを始め、一般校においてもそれまでの教科の枠内において新しい教科の趣旨を生かした「試行」が始められた。移行期の平成 2, 3 年度になると、生活科と社会科・理科を組み合わせた研究発表校がしばしばみられるようになった。

そこで、本研究においては、生活科の新設が決定して以降、完全実施に至るまでの約 5 年間に生活科授業研究がどのように推進されたのであろうか、また、生活科の授業創りの手掛かりは何であったのか、子どもたちはどのような力をつけることを願って学習指導が展開されたか、指導事例を基に明らかにするものである。新しい教科を生み出す難しさに直面しながらも、苦難をはねのけて根気よく実践研究を進める強い志があったのであろう。生活科模索期の生活科学習指導の実態を分析することによって、小学校低学年における学習指導の何が大切であるかが見えてくるものと考えられる。合わせて、生活科模索期の教科指導の取り組みを明らかにすることで、今日に受け継ぎたい教科の特性を把握することを目指すものである。

2 研究方法

(1) 対象

「生活科」発足前後から生活科移行期までにまとめられた三河地域の資料を収集し、そこに記載されている研究経過・研究内容及び学習指導案を

基に概要を把握する。さらに、それから明らかになる生活科への取り組み状況をとらえて、当時の生活科指導の特色を明らかにする。

(2) 分析の視点

新教科「生活科」学習指導成立の過程を明らかにするために、まず当初の生活科像や生活科学習の姿、生活科の研究組織等をまとめる。さらに次の観点に従って当時の生活科研究実践で今日に引き継ぎたい事項を整理する。

- ・生活科の立ち上がる段階で、研究体制組織がどのように生まれ、生活科研究が展開されたかを明らかにする。発足当初から、生活科像をいち早く明確にして生活科授業像を確立するその経緯をまとめる。

- ・生活科の授業像が明確でない中で、先駆者は何を手掛かりに生活科学習指導を創造したか押さえる。また、活動・体験、気づき（筆者注 当時の資料は「気づき」と表記）などのキーワードを基にして学習の要素をどのように見出したか、生活科で目指す子どもの姿と合わせて生活科像作りの状況をつかむ。

- ・生活科は、低学年の社会科・理科廃止により成立した教科である。よって社会科や理科の内容を受け継いで社会事象・自然事象が取り上げることが考えられる。一方で子どもの生活に根ざす教科でもある。子どもの生活の何に学習につながるものを見出したのか、学習を組む動機を押さえる。

II 教育課程研究校等の取り組み状況

1 三島小学校の探った生活科授業

愛知県岡崎市立三島小学校は、昭和 62・63 年度の 2 か年、文部省から小学校教育課程（算数科）研究指定校の委嘱を受けた。研究 1 年次の発表は昭和 63 年 2 月 27 日、2 年次の本発表は昭和 63

年11月4日に行われた。算数科教育課程の研究を中心とし、合わせて教育課程の改訂で新しく取り上げられることが決定していた「生活科」についても研究が手掛けられた。

昭和62年4月研究の出発にあたり、研究組織の4研究部の一つに、「生活科研究部」を設置し、社会科主任を部長として4人の部員で生活科実験単元の創案・実施・検討から始め、単元設定と実践を繰り返して生活科年間計画を作成した。三島小における「生活科の位置づけ」は、子どもと自然・社会の混じり合ったところに生活科を置く。さらに、生活科について、「知識、理解を重視する従来の社会科・理科と異なり、具体的な活動や体験を大きな柱としているのが生活科である。そして、その具体的な活動や体験が媒介となって、自分の生活が見直され、設計されていくところに価値がある。」¹⁾と押さえるのである。

(1) 研究1年次(昭和62年度)

実験単位としては、まず1年「秋をみつけよう」と2年「育てる」の創設と実践がある。当初に手掛けた授業研究は次の通りである。

- ・6.4 生活科「2年 育てる」授業実践
- ・6.24 生活科「2年 育てる」授業実践
- ・8.18 生活科「1年 秋をみつけよう」の単元計画検討
- ・9.30 生活科「2年 育てる」授業実践
- ・11.12 授業研究会—生活科「秋をみつけよう」1年授業実践

生活科の学習を、実験的に研究していくために、次のような考えで進められた。

- ・児童が自分の問題意識を持って実践できる「ゆとりある計画」
- ・意欲的に活動しようとする「問題意識に支えられた体験学習」
- ・学習計画は「弾力的に運用」

(2) 研究2年次(昭和63年度)

第1年次を受けて、第2年次「生活科研究部」は、「研究の深化に努める」として、「活動や体験を重んじた生活科」を目指し、次の4点を「研究の視点」とした研究方向を示した。

- ・子どもの考えで活動や体験が連続する単元構成
- ・大単元を核にした年間指導計画の作成

- ・生活科の特性を明確にした内容の具現化
- ・個々の活動をフィードバックして、共通化する場のあり方

本発表において、生活科の価値を「子ども自身と社会、自然の三者の関係を活動や体験を通して学ぶこと」²⁾と押さえている。また、2年次研究では、明らかになった「生活科」の姿を受けて、「生活科の特性とその具体化」において、生活科学習内容・学習活動を次の4点にまとめた。

① 活動や体験を核にした学習である。

生活科においては、対象の内に自分自身をおき、自分とのかかわりでとらえる。活動や体験で学ぶ教科で、その活動や体験を具体化する手だてとして、「調べる、育てる、作る(遊ぶ)、かかわる、続ける、生かす」³⁾を六つ挙げている。

② 自分とのかかわりで、社会や自然をとらえる。

子どもの身近にある社会や自然を対象とすることにおいては、従来の社会科、理科と同じである。店を扱う学習ならば、生活科においては、子どもが店に行き、そこで自分の力で買い物やお使いができる。動植物を育てる学習ならば、それらも自分たちと同じように、生命を持っていることに気づき、それを愛する心情を育てる学習である。

③ 自分自身への気づきを大切にする。

自分を知ることは、まさに自立への第一歩である。自分の長所、短所、自分を支えてくれる人々に気づくことになり、生活上のルールや人への思いやり、感謝の気持ちが生まれてくる。

④ 生活上の習慣や技能を身につける。

活動や体験を重視する教科で、必然的に人々とかかわりが生じてくる。手紙や電話で用件を伝えたり、依頼したりする。

この生活科授業像模索の段階においても、既に「自分自身への気づきを大切にする」ことが掲げられている。その内容は、「自分の長所・短所、自分を支えてくれる人々に気づくこと」⁴⁾として、生活上のルールや人への思いやり、感謝の気持ちを例示している。気づきの内容は限定的であるものの「自分自身への気づき」を掲げていることは注目に値する。そして、もう一つ押さえられているキーワードは「かかわる」ことである。学習対象とかかわったり、人々とかかわったりする。活

動や体験をすることで、必然的に人々とのかかわりが生じて、必要な習慣や技能が身につくというものである。

(3) 三島小の研究成果

三島小においては、二段階にわたって生活科の授業を公開した。それぞれ「実験単元」を設定して、1年次から2年次へ実践を繰り返して内容を精査し、「生活科授業像」の基を示した。とりわけ2人の中堅・ベテラン教師コンビを低学年に配置して、2人が1年生・2年生を交互に担任することで生活科授業の基本スタイルができた。その結果は、「年間指導計画」として、1年102時間、2年105時間分の第小単元名と主な学習活動を世に問うところとなった。

また、生活科におけるキーワードとなる活動や体験、気付き等を押さえた単元設定、指導計画案を立てている。学習活動において、活動や体験を繰り返しながら中核に迫っていく実践である。そのために、子どもたちが喜んで取り組み、様々な気付きを見出す、魅力ある教材を取り込んで内容が組まれている。そんな中で学習活動を「調べる、育てる、・・・」の六つに具体化することによって、指導する教師にとっても、学ぶ子どもにとっても生活科の学習を円滑に進める流れができています。

実践を進めるにあたって、必ずしも順風満帆に進められたわけではない。ウサギの無残な突然死への対応に苦悩する教師の姿とその対処の是非、校内で米作りを続けながらも水田が消滅した学区の実態など、逆境の中で解決の糸口を見出して、子どもたちに様々な活動や体験を用意する教師集団ができています。負の財産と思われることも有効に活用することで、子どもたちにとって意義ある生活科の学習となって心に残るものとなった。

2 御津南部小学校の究めた生活科授業

愛知県宝飯郡御津町立（現、豊川市立）御津南部小学校は、昭和63年、文部省より生活科研究推進校として委嘱された。平成2年までの3年間に及び、生活科授業創りに関する研究成果を研究図書『子どもの思いや気づきを生かす楽しい生活科の授業』（1990年刊 黎明書房220頁）にまとめた。生活科の授業像が明確でないこの時期に出版されたことの価値や意義、教育関係者に与えた影響は

大きいと思われる。新教科創造の原点に立ち、生活科の目指す目標や内容にしたがって子どもの具体的な姿を踏まえた指導計画作成や授業構想の立案がなされた。指導講師には、当時の中野重人教科調査官を始め、社会科教育・理科教育に関わる大学の研究者や小学校の教師等が携わっている。

御津南部小による研究の出発は「子どもたちの学校生活が、身近な自然やさまざまな人々との出会いになり、より充実した活動や体験の場となることを願って、本校の生活科は始まった」⁵⁾とされている。子どもの実態を踏まえて、「この『活動性』を引き出し、自立への基礎を養うことが生活科の授業で求められている」⁶⁾として、あくまでも子どもの姿で授業が語られている。授業計画作りは、身近な地域のとらえ方のあいまいさを是正し、「子どもをとりまく環境としての地域を知るためには、地図やさまざまな資料を基にした机上の作業と現地を歩いたり、聞き取りをしたりする実地の調査とが必要」⁷⁾と位置付けて、生活科マップや生活科ごよみ作りを行っている。「みと町マップ」・「みと山たんけん」地図であり、「御津南生活科ごよみ」である。子どもたちの具体的な活動は、案内板作り、遊園地の形をかく、「なかよしの木」と対面などが盛り込まれている。

こうした教育環境、教育諸条件の整備は教職員の協力体制のみならず、保護者や地域の支援があつての結果であろう。その成果が、実践研究冊子としてまとめられた。

生活科研究1年目は、各研究部会等で集約されたメモに次のような課題が提示された。

- ・生活科と総合活動・行事とのつながりを明らかにしたい。
- ・生活科のめざすものは何なのか、再考する必要がある。
- ・「生活科の授業像を求める」に重点を置く。
- ・指導案の形式を早く立てる。(生活科にふさわしいもの)

(1) 研究2年次（平成元年度）中間発表

2年次の研究発表会を10月31日に行った。この年は「授業創り」に力が入られ、その一端を残された学習指導案から検証したい。

○1年「がっこうたんけん(たのしいがっこう)」

A教諭 平成元年5月19日実践

単元目標が二つに分けて記載されている。一つは「単元の全体目標」であり、今一つは「活動の具体目標」である。全体目標では「場所が分かる」「安心して生活していくことができる」など、学校探検を通して得られる目標である。活動の具体目標は、意欲、表現、自分自身への気づき、自然や社会への気づき、習慣・技能の5項目に分けられている。その内容は、絵に表わす、仲良く利用する、施設や遊具があることがわかる、正しく使うことができる等、活動することで達成できる目標である。従来の低学年社会科で立てた目標が散見される。

21 時間にわたる実践には「学級会活動」「学級指導」の時間も関連付けている。子どもたちはどちらかといえば遊び感覚、遊びの延長で探検活動をしている。そこに教師が学習として仕組む構想に価値を見出す。本時においては、教室から音楽室に出かける通りの道の学習が組まれている。3階建の校舎図を掲示して通り道を押さえる。授業後の「全体協議会」の記録に「工夫された平面図が良かった」「探検カードは子どもたちが興味を持ち、おもしろい」等が見られた。生活科の新しい学習活動を構想し、良さや面白さを評価し合う教師集団の姿が垣間見られる。

本時の指導過程の記述の仕方は一定しておらず、学習活動の表記はさまざまであった。本学習指導案もその傾向が見られた。「話し合う、探検する」といった学習活動の見出しに続いて子どもの予想される発言を吹き出しで列記し、そこから生じるだろう子どもの思いや考えをまとめて記述する形である。生活科の立ち上がりの頃、学習活動は子ども主体ということで、このような本時展開案がしばしば用いられた。

(2) 研究3年次(平成2年度)本発表

研究発表会では、「自ら考え 進んで行動できる子どもを育てる授業をめざして」を研究主題に掲げ、目指す子どもの姿を次の4点で示した。

- ・自分のことは自分でできる子ども
- ・集団生活になじむことができる子ども
- ・自分の考えや気持ちが伝えられ、友だちの話に耳を傾ける子ども

- ・めあてを持って生き生きと行動し、自分自身への気づきを高める子ども

御津南部小の生活科は、「育てたい子どものすがた」で示す点に特徴がある。授業場面を想定して、あるべき学習の方向を子どもの姿で表現するものである。授業創りにおいては、3つの視点から授業をイメージして検討された。

- ① 子どもが「めあて」をもって取り組むようにするには、どうするか。
- ② 子どもの思いや気づきにふさわしい教師の援助や役割は、どのようなものか。
- ③ 活動を発展させるには、どのようにしたらよいか。

そこで得られた成果は、「子どもの活動がつながる条件をさがす」と「学習過程を構想する」である。特に後者は「生活科の学習過程」として「授業づくりの4つのポイント」を示している。

- ・子どもと教材の出会いを大切にする
- ・めあてを持って生き生きと取り組む
- ・思いや気づきを生かす
- ・自分自身への気づきを高める

「導入」時における「教材との出会い」、それを踏まえた「めあてを持った取り組み」、「展開」における「思いや気づきを生かす」こと、そしてさらに「終末」における「自分自身への気づき」の高まりである。また、4つのポイントのすべてを充実させるというのではなく、重点を置いた単元の流れにするように考えられている。

その結果、生活科の授業は子どもの思いや気づきを生かしたものとしたいと考えられ「学習指導案から学習活動案へ」と名称を変更している。「子どもが授業の中心になることを意図」して、「授業観を少しでも変えたいという思い」に基づくものである。

(3) 御津南部小の研究成果

御津南部小の求める生活科は、子どもの日ごろの生活を探ることから始めている。子どもたちの学校生活、子どもたちと自然や社会、人々との出会いなど、学校や地域、家庭における生活に学習の素材を求めた。教師が実際に出向いて生活実態を把握したり、保護者や地域の人々の協力を得たりしている。活動や体験においても、具体的な動

きを子どもに委ね、子どもが何を追究するか、その道筋を追いながら、反応を分析する。生活科の基本形としてふさわしい取り組みと考えられる。

また、生活科を創設するにあたって、やはり低学年の社会科・理科を廃止したことから離れることは難しい。両教科の求めていた内容を念頭に置くと、生活科の中に関連が見えてくる。生活科学習における地域的な広がり、身近な自然事象との出会いなど、子どもたちの学習として大切にしたい事からである。さらに、生活科で学んだ子どもたちが3年生、4年生における社会科や理科学習でどのように発展的に学ぶか関心の持たれるところである。研究発表時の公開授業に社会科・理科、また道徳学習で学びの発展を考えたものであろう。とりわけ社会科学習では、地域の事象の扱いについて、生活科から社会への関連、社会科から見た、これまでの生活科の扱いという見方で、学習の発展が考えられている。

3年間にわたる実践研究は、より良い生活科像を求めて授業構想の修正が繰り返された。全くの手さぐりの初年度における教育研究論文として世に問うところから始まり、2年目・3年目と単元を構想し直しては授業実践を行い、より確かな「生活科像」が作り上げられている。ときには同じ単元を同学年の他の教師が行う修正を加えた内容も見られた。こうした授業実践研究に加えて、上学年・下学年でペア学年を組んで内容の検討を進めたことも大きい。異なる視点の基、弾力的な考え方で論じられたことであろう。

生活科の始まりのころ、生活科暦・生活科マップは学校に必須と考えて用意された。また、生活科探検カード、名刺づくりなどの名称も先進校から広まったものと考えられる。そうした生活科の基となる事物、それにかかわる周囲の人々との出会いなど推進校の果たした役割は大きい。

3 愛知教育大学附属岡崎小学校の求めた生活科授業

(1) 生活教育に根ざす生活科授業

愛知教育大学附属岡崎小学校では、毎年6月初めに生活教育研究協議会と題した研究発表会を続けている。その中に生活科が初めて取り上げられたのは1988年(昭和63年)である。その頃は、文部

省教育課程審議会答申で生活科構想が打ち出されて間もなく、まだ生活科が正式に教科目として位置付けられてはいなかった。よって、実践科目名は「生活科を指向した社会科」とあり、社会科の位置づけになっている。それは筆者の実践単元で、学習内容は多分に社会科の色合いが強く、単元名は「いいにおいのするきゅうしょくしつのみみつ」であった。

その後、文部省から平成元年(1989年)3月15日に学習指導要領の改定の告示により、研究協議会においても生活科として位置付けられた。

生活科準備期及び移行期における研究発表会の単元名は、次の通りである。

- ① 1988年(昭和63年) 1年「わたしとおかあさん」 *移行期前の実践
- ② 1989年(平成元年) 1年「附小って たのしいよ」
- ③ 同 2年「学校のまわりがおもしろいよ」
- ④ 同 1年「あきって、おもしろいな」
- ⑤ 1990年(平成2年) 1年「虫さん 葉っぱも食べちゃうの」
- ⑥ 同 1年「チャボのたんぼぼ山をつくろう」
- ⑦ 同 2年「はっ車オーライ!バスでおでかけ」
- ⑧ 1991年(平成3年) 1年「きこえるかな」
- ⑨ 同 2年「〇〇さん おてがみかいたよ」

この間、1990年の研究紀要では、「本校の生活教育と生活科」と題した、生活科と生活教育のつながり、生活科の授業構想を提示している。その中で、「この時期に、豊かな経験、思い切った活動を保障することがその後の学習活動に大きな影響を及ぼす」⁸⁾として、生活科の重要性を強調している。また、教師の思いだけが先行するような活動は厳に慎まなければならないとし、「ひとりひとりの子どもの活動を大切にする単元構想でありたい」としている。子どもの生活の中から単元を構想して、活動そのものがひとり調べであり、活動を通して子ども同士がかかわり合うこともあると位置付けている。生活科という教科が新たに発足したものの新しい何かを起こすと考えるのではなく、子どもの生活そのものの中に学習を見出して、その子なりの追究を支えるというスタンスと

とらえることができる。

生活科でねらうところを、次の文でまとめている。「わたしたちは、今、子どもによりそい、子ども活動に至る思いがどこから発しているかを的確にとらえ、この子にとって何が必要かを把握しなければならない。そうしたとき、生活科の授業がみえてくる。」⁹⁾ 研究方向は、まず子どもありき、子どもの中に、子どもの生活の中に生活科があるにとらえることができる。

附属岡崎小の考える生活教育の原点は、日頃の生活にあるという考え方で、生活科の考え方とは共通しているところが多い。ここに筆者の実践単元を取り上げさせていただく。担任教師としてまとめた最後の実践単元である。

平成2年5月～7月 1年「チャボのたんぼぼ山をつくろう」(24時間+学級活動3)

学校探検の一環で、学級でつがいのチャボを飼育しながら、その餌としてのたんぼぼを求めて校庭の隅々まで出かけるものである。子どもたちは、チャボのために各種の餌を準備する中で、たんぼぼを好むことが分かる。たんぼぼの自生する場所を見つけては順次餌として与える。よく見つけられる子は、その生えている場所を地図に書いて他の友達に示す。ただ、それだけでは餌として不足するだろうと予測してたんぼぼ栽培を目指す。教室前の小山へ移植してたんぼぼを増やすことを考える。名付けた「たんぼぼ山」へ移すために、たんぼぼを土中深く掘ることは容易ではないが、できる限り根の先端まで掘り進める。チャボの楽園「たんぼぼ山」作りを始めるが、簡単にはいかない。ときどきは、たんぼぼの茎や花卉等の遊びを取り入れながら、たんぼぼを探し歩いたり、たんぼぼを掘って植えたりする。

実践を通して積極的な活動を求めながらも、子ども同士の助け合いや協力体制の必要性に気付いていく子どもたちを見る。本単元は学校探検から始まり、飼育・栽培から自然事象での遊び、そして友だちの良さに気付く人間関係まで盛り込む実践内容となった。

(2) 附属岡崎小の研究のまとめ

上記の9実践を基に、実践傾向をまとめる。

○附属学校の場合、居住地が広範囲にわたるため、

共通となる遊び場、活動の場を持ちにくい。おのずと、校庭内もしくは学校周辺の公園や公共施設、商店等浮かび上がってくる。教材を準備するにあたって、学習素材を用意しながらも、子どもの生活に根ざす学習指導を展開するために、子どもの動きを待つことが多い。子どもの対象への関心や問題意識の高まりを待って教材との出会いとなる。

生活教育における子ども生活に根ざす学習指導は、生活科指導の在り方とマッチしており、違和感なく進められている。それは、「生活教育の理念は、生活科における自立への基礎に繋がる。子どもに生きて働く力を考える点では、生活科のねらいと本校の生活教育のめざすところは相似ている」¹⁰⁾ からも分かる。生活科と生活教育と同じ方向を目指していたことで、新しい教科でありながら馴染みやすく、スムーズに受け入れることができたと考える。

○生活科にとって、とりわけ教材開発は必須である。新しい教科だけに、それまでに示めされた指導事例は少なく、頼るところは限られていた。子どもの姿を見込み、教材を準備するが、日々刻々と変わる子どもたちのためには柔軟性のある素材・教材が欲しい。そうしたとき、従来の社会科・理科、その他各教科・領域との有機的な関連性が考えられる。生活科のねらいに即して、少しでも掘りどころとなるものが求められた。

附属学校における生活科担当教師は、筆者を含めて社会科・理科を主たる研究教科として取り組んできた経歴を持つ者が多い。そのため、自然事象・社会事象とのかかわりを積極的に取り込んでいる例が目立つ。

○研究発表会、もしくは校内研究実践で進められた実践単元だけあって、一つ一つにかかる時間数は多い。14～29時間で、20時間を越える単元が目立つ。しかも、他教科・領域と合科的・関連的に扱っている。生活科指導においては、指導内容を細分化すると多くの事がらを扱う。そこで、子どもの実態や地域の状況を考えて内容に軽重を付け、取捨選択をして、一つの単元で複数の内容を盛り込んで扱う事例が多く見られた。それによって合科的・関連的に学ぶように指導することになる。

大単元構想は、ダイナミックな構想を打ち立て

ることが可能になり、時間数を多く費やして追究に広まりと深まりを求めることができる。基本的な年間計画を立てながらも、子どもの状況に応じ、組み立て変えて学ぶ構想となっている。子ども個々にとっても、学ぶ対象、学び方が異なる。学級の様々な子どもの追究に応じた内容を盛り込むためにも、大単元化は必須である。生活科の学習内容を洗い出して、子どもに合わせて組み直す検討を行った結果と考える。

4 三河教育研究会生活科委員会・部会のまとめた生活科研究

(1)「昭和 63 年度 生活科研究 NO. 1」より

三河教育研究会に生活科が加えられたのは昭和 63 年である。63 年度刊行「生活科研究 NO. 1」生活科委員長の巻頭言に「この集録は『生活科とは何か』を第一年次の課題として研究の成果をまとめたものです。」¹¹⁾とある。三河教育研究会の教科・領域別の各部会・委員会の中に、特設委員会として生活科委員会が設けられ、刊行された冊子である。平成 4 年度からの全面実施に向けて、またそれに伴う平成元年度から移行措置に合わせて、互いの情報交換・実践研究冊子として出された。

わずか 60 ページの小冊子にもかかわらず、三河地域小学校から多数の需要があり、生活科指導実施に向けての参考資料として活用された。当初の各郡市委員の配布用に加えて、各郡市の要望を受けて増刷されることとなった。原稿執筆にあたったのは、先行研究を進めている学校に限られた。合わせて、研修会では、全国の附属学校の中でも先進的に生活科に携わっている実践研究者を招いて「生活科の単元構成と展開」について研鑽を深める機会も持たれている。各学校では、生活科に関する資料や必要な情報が限られている中で、こうした研究委員会が組織されて、多くの希望者が研修できたことの意義は大きい。三河教育研究会の生活科郡市代表の各委員（1，2 名）は、地元郡市単位で行う研究会や学校代表を集めた「生活科主任会」等で情報交換することによって、各学校における生活科研究の土台作りとなっていく。

とりわけ文部省の生活科研究委嘱校及び教育課程研究校の 2 校において、生活科の実践研究が先行して進められた意義は大きい。それぞれ東西三

河の生活科研究の中心校として授業実践が公開され、協議会が開かれている。合わせて「生活科単元指導計画」や「生活科年間指導計画」を立案して公開された。本冊子に記載されているのは、研究の概要と指導例ではあるが、これを資料として生活科を始めるに当たり、各学校で何が必要か明らかになったものと思われる。

(2)「平成 2 年度 生活科研究 NO. 3」より

平成 2 年度は、小学校 1 年生で社会科・理科から生活科への移行の始まった年である。社会科・理科の内容を残しつつも、生活科を導入することとなった。三河教育研究会において、生活科は当初「臨時特設委員会」であったが、平成元年度から教科・領域の一つの「部会」に昇格をして他教科・領域と同じように教育研究活動を開始していた。生活科の役員・委員組織については、各郡市で生活科に率先して取り組む委員 2 名ずつを擁して総勢 43 名となった。その組織が中核となって生活科研究が進められる母体が確立されている。

生活科に関する研修会の概要は次のようである。

○生活科学習会 平成 2 年 7 月 3 日

「生活科における学習の在り方について」講演会
愛知教育大学 寺本 潔 先生

○生活科夏季研修会 平成 2 年 8 月 3 日

テーマ「生活科の単元構成と展開」

・基調提案 三島小学校 熊谷光男 先生

・分科会提案 3 分科会 6 実践 6 郡市代表
助言者 愛知教育大学 船尾日出志 先生
木村博一 先生

御津南部小学校 田中 實 先生

・講演会「地域に根ざした生活科から子どもに根ざした生活科へ」

上越市立大手町小学校 小林毅夫 先生

これらの生活科学習会・生活科夏季研修会の成果や、三河地域 19 郡市の実践事例を掲載した『生活科研究 NO. 3』に掲載し、希望者に頒布された。

Ⅲ 移行期における先進的な生活科研究

1 安城市教育研究所研究報告第 38 号「生活科単元構成と展開例—1 年—」平成 3 年 3 月

安城市教育委員会の生活科への取り組みは早く、昭和 63 年に始まる。まず市の指定「生活科研究グ

ループ」を発足させている。平成元年度には「生活科の単元構成と展開の試み」を、平成2年度には「生活科単元構成と展開例—1年—」を作成して各学校へ配布している。幼小連携を考え、幼稚園の先生も加えた研究グループである。後者の「単元構成と展開例」は、60ページ余の冊子で、1年生の「年間指導計画」において、9単元名と各単元の活動計画や展開例が示されている。

10名の研究委員からなり、「指導案の作成から授業研究、そして反省」を繰り返して実践研究をされたもので、「試案」ではあるが、各学校においてはこれを基にして、学区の状況や子どもの実態を踏まえた年間計画が作成されたものとする。

本書には、「実践上のポイント」4点が示されている。

- ・主体的な活動の尊重——自由な活動の保障
- ・安全確保、家庭への協力依頼の必要性——多い校外学習での安全確保、家庭への協力依頼
- ・他教科・他領域との関連——学校行事や国語・図工との合科的な指導
- ・地域性の考慮——地域の特性を生かす単元を強調

どの学校においても参考にして活用できるように、一般的な単元設定で組まれている。それだけに学校における独自性が期待され、子どもの活動意欲をそそる授業展開が必要となる。小動物を捕まえたり、草花で遊んだりする活動を取り入れて意欲的な学習指導の工夫が望まれる。それに加え、「子供一人一人の個々に対応して活動させること」を希望している。難しい課題ではあるが、生活科ならではの期待であろう。

次の年の平成3年度には、2年生の「年間指導計画」が配布されたこととする。

2 三河教育研究会生活科部会「夏季研修会」

平成3年8月

平成3年度の夏季研修会は、「子どものくらしに生きて働く生活科の授業」というテーマで実施された。移行期2年目で、1年生・2年生揃っての分科会提案が行われた。この時期から今日に至る研修会の基本線が整った。

1. 基調提案、2. 分科会・分科会報告、3. 講演会という順である。

この研修会の分科会提案は、前年度実践もしくはこの年度の1学期を基に用意される。1年生部会は4月・6月・2月実践の3報告であり、2年生部会は移行期に入る年のため、いずれも当該年度の6・7月の実践の3報告であった。1年生実践の一つは、「生活科ノート」の活用について、5人の教師が協力し合ってより良いノート作りについて報告している。今日の「せいかつかノート」

(公益財団法人愛知教育文化振興会刊)作成のための試行である。「子どもたちの活動がより確かな力になる」、「ノートは子どもの活動を豊かにするもの」というビジョンを掲げての取り組みである。2年生の3実践は時期的なこともあって、いずれも生き物を扱っている。チャボ、ザリガニ、川の生き物で、後二者は水族館作りを目指す。単に飼育するだけでなく、長く飼いつけることで生き物とのふれ合い、友だちとの関わり合いを期待するものである。単元を通して交友関係の広がりや達成できたものの、「生命の不思議さに感動し、生命の大切さにもっと気づいていくようにさせたかった」と反省する。水族館作りでは、子どもたちは楽しんで活動していたと手応えを感じながら、一番楽しんでいたのは「もしかすると私なのではないか」と実践者は振り返る。生活科実践に意気を感じながら立ち向かう教師の姿は見える。

夏季休業中の8月上旬に三河教育研究会の各教科部会では、夏季研修会が開催される。生活科部会発足当初は、研修会の持ち方について模索状態であったが、4年目のこの年になってほぼ体制が整ってきている。平成3年度は移行期ということもあって、参加者名簿には250人にのぼる名前が記載されている。基調提案は元御津南部小研究主任、分科会6提案は郡市ごとに選ばれた教師によるものである。そして講演は「子どもが生き生きと活動する授業の創造」と題して、実践研究者である大阪教育大学附属天王寺小学校津川裕先生によって行われた。ここに至って、実践的研究を積み重ねた研修会を持てたことで、平成4年度からの完全実施の出発点に至ったものとする。

3 愛知県東加茂郡旭町立(現 豊田市立)小渡小学校研究発表会 平成3年10月

小渡小学校は、平成3・4年度愛知県教育委員

会・東加茂地方教育事務協議会より「学習指導（生活科）」の研究委嘱を受けた。「豊かな感性を育てる生活科の創造―川・森・遊びの教材化―」をテーマに、平成4年10月9日に研究発表会を開催した。その研究紀要と、筆者がかかわった授業研究会資料を基にして研究の概要を述べる。

小渡小学校は矢作川の上流に位置し、自然環境はもちろんのこと、町役場があることから行政・商業といった社会環境も整っている所である。全校で108人（平成4年4月）1学年平均18名という小規模校である。学校のすぐ前に矢作川が流れ、森林に囲まれていることから、川と森、そして遊びを学習素材として取り入れた教育を、生活科を中心展開することを試みたものである。研究教科として、他に社会科・理科などを「生活科との接続・発展を図る」ことで、主題「子どもの側に立った教材の開発と授業の構想」へ取り組んだものである。

生活科においては、たんけん・ひみつ・じまんをキーワードにしている。

- ・「たんけん」発見型の活動・・・わくわくさせながら発見する姿
- ・「ひみつ」探求型の活動・・・気づき、こだわり探求する姿
- ・「じまん」表現型の活動・・・互いに認め合い、自信を持って活動する姿

子どもの体験を通した実感的なわかり方を大切にしており、子ども自らが問題に気づき、解決に向かって活動し、新たな気づきを生む授業が考えられていた。いずれも子どもの側から活動と流れをとらえようとした「子どもの側に立って授業と構想」を基本にしている。

3年社会科「生活を高める人々」では、生活科との継続を図った授業が組まれている。生活科とのギャップを生じさせないために、導入単元では、「学校周辺の地域とそこに住む人々の生活の中から子どもたちが親しみやすく、学習したことを実際に地域の一員として活動し、利用することのできるもの」と考えて、大単元「生活を高める人々」では、「花だんのひみつみつけ」と「総合体育館たんけん」を設定している。ひみつ・たんけんといった単元名からして、生活科からの接続を考慮し

たものと思われる。

生活科正式発足の平成4年度から、生活科と社会科・理科を含めた研究発表会が各所で行われた。生活科が身近な地域の自然事象・社会事象を扱うことから、3年生以上の学年では社会科・理科が取り入れられて研究会をもたれたものであろう。小渡小の研究はその出発点にあたるものである。

小渡小では、活動や体験にあたって「子どもがつくる授業」を目指し、子どもを前面に押し出している。子どもの側に立って、活動や体験を設定しており、「子どもが自ら求めるものにする」と考えて学習を展開している。そのためには、教師の学習素材研究、教材研究には十分に配慮されており、自然事象・社会事象に、保護者や地域の人々をも巻き込んだ準備態勢ができています。研究のまとめを見ると、子どもたちの生活ぶりを教師が熟知しており、一人一人を見守りながら、待つ様子がうかがえる。

生活科の学習を進めるための様々な条件に恵まれた学校での研究であり、発表資料を参考にして研究成果が広まったものと考え

IV 研究のまとめ

三島小・御津南部小から始め、三河教育研究会生活科部会や附属岡崎小学校等での実践・研究の取り組みについて、次の4点に整理した。

①「活動」や「体験」は、生活科試行の「実験単元」段階からのキーワードである教育課程研究校や生活科研究推進校において、「活動や体験を通して…」と、子どもたちに自然事象や社会事象で多くの「気づき」が生じるように願って多用された。そこには、子どもたちにどのような力を付けたいか、目指す子ども像が存在した。活動や体験は一つの手段で、結果としての育てたい子どもの姿があった。

この研究校・研究推進校の2校は実験単元を積み重ねて、それぞれ「年間指導計画」作成までに至った。子どもたちの生活環境の異なるこの二つの地域の計画は、生活科の単元を立ち上げる際に大いに活用されたものと思われる。三河教育研究会生活科部会の研修会や研究冊子にも活用されて、三河地域のそれぞれの郡市や各学校において、指

導案作成・授業実践に発展したであろう。

②新しく単元を立ち上げるにあたって、頼りとするところは文部省から示された資料の他には、やはり、それまであった社会科や理科の学習で取り扱われていた社会事象や自然事象である。子どもたちが活動や体験できる諸事象は、学校や地域に求めるところとなる。どのような内容を取り上げることが、子どもたちの「自立への基礎」となるか大いに研究された。子ども既存の知識や経験を基に、さらにそこから生活を拡げて構想されるところとなった。

そこで、子どもたちにとって価値や意義のある学習対象を求めていくと、おのずと「子どもをとらえる」必要が生じる。子どもにとっての学習という原点に立って考える動きも見られた。生活科はまず「子どもの生活ありき」、子どもの生活の中に学習素材、教材として有効な内容を見出すものである。生活科研究校、生活教育研究校において「子どもの生活をとらえる」動きが見られた。三河教育研究会生活科部会においても「子どもの生活に生きて働く生活科」を主題にして研修会・基調提案等が行われている。

③先進的な生活科研究校から始まって、研究団体がそれを組織的に広げる活動や、先を見通して郡市単位で年間計画を作成する動きは大切である。「生活科」という教科の専門家がいない中で、幼稚園教諭の協力や連携を持ちながら、生活科が立ち上げられた。大学の生活科研究者や先行する生活科実践研究者の指導を得ながら、次第に「生活科授業像」ができていった。移行期の平成2・3年には、1年生から順次始まって、生活科担当者が拡大されるところとなった。

生活科移行期前後から、生活科を中心教科として、社会科・理科という地域の社会事象・自然事象とのかかわりの多い教科を取り込んだ研究会を設定する学校が見られるようになった。低学年においては生活科、中・高学年では社会科・理科、時には道徳・学級活動といった教科・領域による研究会開催である。それによって、学校全体で生活科の在り方について検討することとなったと考えられる。

④生活科の単元設定を今日から見ると、生活科発

足当時は、地域とのかかわりにおいて、そこで生活する人々のつながりがあり見られなかった。子どもたち同士や学校内における職員とのかかわりにとどまっている。子どもたちの活動が広がるにつれて保護者の協力を得て、地域の人を「先生」や「名人」として学校とのかかわりを持つようになっていく。子どもたちが生活の広がりとなる重要な活動と考える。

生活科模索期における手探りで実践を進める様子をまとめた。今日では生活科学習指導において、それぞれの学校ではほぼ内容が定着してきている。それだけに指導者の側に新鮮な気持ちで取り組む姿勢が薄れているように思われる。子どもにとっては新しい学習との出会いと考えれば、より精選し、学習素材を用意して子どもの動きを待つ姿勢で臨みたい。日々新たな教材研究の望まれるところである。自然事象・社会事象一つをとっても、自然の不思議さ・面白さ、社会の仕組みや取り巻く環境の良さ・温かさが感じられる。感性豊かな子どもが育つ学習を用意したい。

【引用・参考文献】

- 1) 岡崎市長三島小学校「教育課程研究 昭和62年度(第1年次)」 昭和63年2月 p. 67
- 2) 岡崎市長三島小学校「教育課程研究(算数科)研究紀要」 昭和63年11月 p. 110
- 3) 前掲書2) p. 154
- 4) 前掲書2) p. 123
- 5) 宝飯郡御津町立御津南部小学校「文部省生活科研究推進校・教育研究開発校『自ら考え、進んで行動できる子どもを育てる授業をめざして』3年次発表会」発表資料 平成2年11月 p. 2
- 6) 前掲書5) p. 3
- 7) 宝飯郡御津町立御津南部小学校著「子どもの思いや気づきを生かす楽しい生活の授業」1990年11月 黎明書房 p. 14
- 8) 愛知教育大学附属岡崎小学校研究紀要41「この子の輝く授業」 1990年 p. 67
- 9) 前掲書8) p. 68
- 10) 前掲書8) p. 67
- 11) 三河教育研究会生活科委員会編「昭和63年度生活科研究 No. 1」巻頭言